

ひらかなな盛衰記 神崎揚屋の段

よ

なだかきなにわづ

こい

ふなつきかずかず

おお なか

世なりけり 此も名高き難波津に 恋の舟着数々の 多かる中
とりわけて さげくみ かんざき

に取り分けて 酒酌みかはす神崎の 里の色宿千年屋は 客に絶間も

なかりける 殊に今宵は晴れのお客と 書院座敷のはき掃除 亭主が

袴 仲居が揃への紅も 園生に植ゑて隠れなき 「大名客御入」と表の

方賑はしく 人目を忍ぶ旅乗物 お供廻りも軽々と 地に鼻つけて主

が答拜 「御出を待ちや焦がれし」と 追従軽薄切声の 切戸口より

直ぐにかきこむ奥座敷 「梅ヶ枝様へ人走らせ それお菓子煙草盆」

釜をたぎらす音羽山 馳走振りとぞ見えにける

雪や霰や花ちる嵐 可愛男に偽りなくば 本の心で淡路島

千鳥も今は此の里へ身をば売られてやり梅の 名も梅ヶ枝の突出し

には名木並ぶ方もなく 千年が許に入り来たり 亭主立ち出で 「エ、

遅い〜梅ヶ枝様 今日のお客は東国のさるお大名 初対面から身請

の相談箱入りの駿河小判 ずっしりとしたお捌き サア〜奥へと

云ひければ 「東国とおしゃんすその客の年ばい はたち計りででっ

くりと色の黒い髭男かえ」 「イヤモけもない事〜それで心が落

ち付いた わたしもこゝに待ち合はせ 逢はねばならぬ人がある」

「おつと合点そこは我らが請け込み 禿衆で座敷をくろめん お前

の御用はあの情夫の源太様に」間の襖を引つ立ててこそ入りにける

「この姉様は何故遅い 杉を迎ひにやつたるに 早う来はなされいで

心せかれや ア、辛気」と待つに程なく姉お筆 千鳥に逢ふが嬉しさ

に 足もいそ〜やりてが案内 梅ヶ枝見るより 「なう待ちかねた姉

様 さつきに道で逢ひし時 云ひたい事の数々も人目を遠慮」 「オ、

そりや姉も同じ事 何からか〜ら云はふやらようまめで居てたもつ

たの」 「アイお前も御無事で嬉しい 久々便りも聞きませぬが 父様

もおまめにある やっぱり桂の里にお住みなされてござるかへ 御持

病は起らぬか」と問ひかけられて お筆は涙 「まだ父様の事知らず

か」 「エ、知らぬかとは氣遣ひ 如何ぞいな」 「アノ父様はなう お

果てなされたわいの」 「エ、ハアハツ」と計りに梅ヶ枝はしばし涙

にくれけるが 「ア、思へばわしは不孝者 父様は息災なまめでござ

ると思ふから 我が身の恋に後先忘れ、末々面倒見届けうと 約束せ

しお人が不慮に勘当受け給ふ男のためにこの勤め 身のいたづらに

親の事思はなんだ罰があたつて 命日忌日が何時ぢややら 知らずに

暮らした不孝の罪 姉様こらえへて 父様のお位牌へ詫言をして下さ

んせ」とワツと叫べば オ、悔みは道理 その上にまだ悲しきはお

煩ひでもある事か 刃にか〜り果て給ふ その様子は自らが木曾殿に

宮仕へ かりそめならぬ御主人の御台若君もろとも父の方にかくま

ひしが 桂の里にも居る事叶はず 都を出でて 大津の泊り 追手の者
 が寝込へ切り込む暗がり紛れ うろたへて 相宿の順礼の子と若君を
 取り違へたその粗相が運の強さ 先の子は殺され若君は恙なくた
 しかな人に渡せしが 悲しいは母御様 その場でお果て 隼人様もあ
 へなき最後 親の敵が討ちたさにそなたの行方 しるべの人に聞い
 て尋ねしこの神崎 巡り逢ふたは姉妹の縁の深さ 女でこそあらうず
 とも 姉妹が心を合はせ本望遂げう 姉が力に成つてたも 頼むは妹
 計りぞ」と語るも聞くも涙なる「なう姉様 悲しい中にも敵を討つ
 が梅ヶ枝が父様への言訳 そのマア敵は誰でござんすえ」「ア、コ
 レ 声が高い 壁に耳 諸万人の入り込む色里 敵に漏れては「大事」
 と咄しのなかばへ亭主かけ出で「サアくく梅ヶ枝様 早うくお前
 の背丈金積んで身請の相談 座敷は金で眩い 其処を不勤めになさる
 るはマどうした心底 是非にお供」と手を取れば「ア、モウ其処へ
 行くと云ふに聞き分けなない コレ姉様 今は何も咄されぬ 後に必ず
 来て下さんせ 成程々々今咄した事 是非に今宵は延ばされず その
 用意して待つて居や 後にく」と約束堅め お筆は旅宿へ立ち帰る
 「サア太夫様のお出での様子 お座敷へ注進」ときほひかゝつて走
 り行く「シヤほんに何ぢやの この梅ヶ枝が心も知らず身請々々と
 取持ち顔 いやらしい それはさうと源太様 暮方からお越しなされ

と 香島まで文やったになぜ遅い事ぢやまで 早う逢ひたや顔見たや
 逢はゞどうしてかうして」と煙草引き寄せくゆるする 胸の思ひは
 日に千度

夜毎々々に通ひ来る 梶原源太景季 心を尽せし身の廻り 大尽小袖
 長羽織 法祿頭巾紫の色に引かるゝ揚屋町 千年が奥を窺へば『お
 れを待つのか畳算』ちやうどよい首尾幸ひ』と ずつと通れば梅ヶ
 枝は 炬燵にとんと身をそむけ 煙くらべん浅間山 と反らさぬ顔
 で吹く烟管「コレ唄どころぢやない 来たわいの 何が機嫌に入らぬ
 やらめつきりと持たせ振り ア、大名客の襟に付き 御勿躰でえす
 かわれらが様な浪人のかびた衿にはつかれまい」と ずんと立つを
 「待たしゃんせ 座敷ばかりを勤める筈で 今日こゝへ貫はれたは
 文で知らせて合点ぢやないかえ 色も恋も打ち越して心底づくの二
 人が中 口舌どころぢやござんすまい お前と一体かうなつたは並大
 抵の事かいな わしも云ふ事たんとある」と 袖から袖へ手を入れて
 じつと引き寄せ引きしめて「遅う来ながらその安忍憎い男」と目
 に脆き 涙ぞ恋のならばはしなり「もうよい泣きやんな疑ひ晴れたさ
 てそなたに云ふ事あり 今夜七ツの出汐に 父をはじめ弟の平次景高
 一谷へ出陣 某もよき時節 軍勢に紛れ下るにつき そなたに預けた
 産衣の鎧請け取りに来たわいの」と聞くにはつと当惑の色目見

て取る景季「イヤ／＼氣遣ひ仕やるな 長う別れる事でもなし 是非
 今度に行かねばならず おこともかねて知る通り もと某は頼朝卿の
 烏帽子子。それを功に勘当の詫せぬかと父の思はく世の人口 えぼしじ この

たび平家と戦はゞ ぶんどりこうみょう 分捕高名誉れを頭はし 今の難儀を昔語り 悦ん

でたも梅ケ枝と何心なく語るにぞ 思ひ設けし事ながら にわか 俄にはつ
 と胸痛み「その鎧の事聞くと心の苦しみ」 「シテその鎧が何とし

た」 「サアわたしが方には疾うとからぬ」 「ヤアヤ、ヤア」と

源太も聞くより狂氣の如く 身を揉みあせり「様子があらう 仔細を

語れ」と氣をいらてば「ソレ／＼／＼その様に浮世の事に疎いのが

大名の懐子 フトコロゴ 浪人の中 苦勞させまいとこの神崎へ身を売り 突出し

のその日より お前を客の名充なめてにして 皆わたしが身揚 みあがり 譬へ世にあ

る人でも 里の金にはつまるもならひ まして勤めの身なれば金のな

る木はあるまいし はえる土は持つまいし お主の勘当赦ゆるる迄とい

つもの揚屋に呑み込ませ 積り／＼し揚代三百両の金のかはりにそ

の鎧はやったわいな」 「さてはその金がなければ 鎧は源太が手に

入らぬか ハアハツ」とばかりに当惑し 暫し詞もなかりしが「元此

の鎧は頼朝卿に拝領 家にも身にもかへざるを しなしたり残念や

今は悔みて返らず」と胸押し寛げ刀を取れば 梅ケ枝あわて押しと

どめ「コリヤマアまあどう狼狽ウロタエてぢや 死ななくても大事ない」 「イ

ヤイヤ今夜の出陣を外れ 一生埋れ木となりのたれ死せんより 只今
 切腹そこ放せ」 「サア／＼／＼その鎧さへ手に入れば お前の望み

は叶ふでないか」 「シテその金は」 「どうして調へると御不審も
 立たう ガそこがお前と談合づく 奥の客に身を任せ たらしなば二

百両や三百両の金は自由」 「さてはおれ故身を汚すか」 「夫の難
 儀にや換えられぬ」 「不憫の者の心やなたとへ死んでも忘れぬ」

と涙ぐめば「ア、女房に何の礼 お前がこゝにござつては 客をたら
 すに心がをかれる」 「ヲ、もつとも 後に来うぞや 首尾よう仕や

ガコレ氣を揉んで持病のつかへ 借銭のかはりに癩しやくおこらしたも
 んな」と別れてこそは帰りけれ

後見送りて梅ケ枝は暫し涙にくれけるが「必ず氣遣ひなさるゝな

エエ、わたしが心充こころあてのあるといふたはみんな嘘 お前の命が助け

たいばかりぢやわいな 何の好よしみもない奥の客が三百両の金くれう

ぞ 今宵中に調へねば 鎧も戻らず 源太様の望みも叶はず 金ならた
 った三百両で可愛い男を殺すか ア、金がほしいなア

「二八十六で文付けられて 二九の十八でついその心 四五の二十
 なら一期に一度 わしや帯解ぬ

「エ、なんぢの人の心も知らず 面白さうに唄ひくつさる ガあ
 の唄を聞くにつけても 源太様に馴染め館を立ち退き 君傾城になり

さがつても一度客に帯解ず 一日なりと夫婦にならうと思ひ思はれた女房を振捨て この度の戦いくさに誉れを取り 勘当が赦されたいと思し召す 男の心はア、ぶんな物ぢやナ 何かにつけて女程思ひ切りのない物はない 男故なら勤めするも厭はねど またどの様な悲しいめを見やうも知れぬ それも金故 何をいふても三百両の金がほしい「へわしや帯解ぬ 二十なら四五の 四五の二十なら一期に一度わしや帯解ぬ かへらぬ昔 恋忍ぶ

「ほんにそれよ あの客殺して身請けの金盗まう イヤくくくも し仕損じ殺されては 父様の敵も討たれず ア、どうせうなものはや 日本国に梅ヶ枝が祈る神も仏もないか ハア、オ、それよ 夫故には石になつたる女もあり 我は賤しき流れの身なれど 一念は誰に劣らん」巖いわおとなれる手水鉢 水結び上げ口すゝぎ 伏拝みくく 人に知らせじ聞かせじと柄杓押し取り 「伝へ聞く無間の鐘をつけば 有得自在心のまゝ これより小夜の中山へ 遙かの道は隔たれど 思ひ詰めたる我が念力 この手水鉢を鐘となぞらへ 石にもせよ金にもせよ 志す所は無間の鐘 この世はひるにせめられ 未来永々無間墮獄の業を受くともだんないく 大事な海川にすたれる金 一つ所へ寄せ給へ 無間の鐘」と観念す 面色忽ち紅梅の花はちりぐく 心も髪も 逆だち上がり 柄杓持つ手も身も震はれ 既に打たんと振り上げる

二階の障子の内よりも「その金こゝに」と三百両ばらりくくと投げ出だす 深山おろし嵐に山吹の花吹き散らす如くにて こゝに三両かしこに五両「これは夢か現かや どなたか知らぬがこの御恩 死んでも忘れぬく」と嬉しいやら怖いやら 拾ひ集める心もそゞろ 袖引きちぎり三百両 包むに余る悦び涙 鎧がはりのこの金と おし戴き おし戴き 勇みいさんで走り行く